



特集

雪の古湯 文学散歩

中国・秦の始皇帝の命により不老長寿の霊薬を求めて日本に渡ったという伝説の人物「徐福」が発見したとされる「古湯温泉」。山間の渓谷沿いに宿が密集する温泉街を通るたびに気になっていたのが、文学碑の案内板だ。街の手前にある雄淵雌淵には現代中国の高名な文学者・郭沫若。温泉街には近代日本歌壇の代表的人物・斎藤茂吉。そして推理小説の巨匠・笹沢左保の記念館もある。なぜ文豪たちは古湯を愛したのか。雪の古湯を散歩した。

小説「望郷の道」の舞台

古湯と文学との関係を調べるにあたり、とりあえず足を運んだのが「佐賀市立図書館富士館」。同館には佐賀市富士町に縁のある文化人の展示があり、古湯に縁がある人物としては、郭沫若、斎藤茂吉、笹沢左保のほか、明治期に夭折した天才少女歌人・原初枝、佐賀県出身のハードボイルド作家・北方謙三の曾祖父であり、小説「望郷の道」の主人公のモデルとなった「アジアの製菓王」森平太郎が紹介されていた。

同館では森平太郎の常設企画が開催中。森が創業した「新高製菓」の主力商品「新高ドロップ」や「新高バナナキャラメル」のほか、お菓子のおまけでプレゼントされたコミック本「ウマイモン太郎」などの貴重な資料が展示されている。「望郷の道」は2008年に日経新聞で連載



天才少女歌人・原初枝の歌碑



森平太郎常設展



有名な新高ドロップ



温泉街にある森平太郎別荘跡地

スタート。物語は日露戦争間近な時代から始まり、佐賀時代の苦闘を経て、台湾で製菓工場を立ち上げ成功を収めるまでを描いている。主人公・正太とその妻・瑠偉の気風のよい生き様が北方謙三らしいスピード感のある文体で描かれており、連載当時、毎日楽しみに読んでいたのを覚えている。個人的には大河ドラマもしくは映画化してほしい、佐賀を舞台にした小説ナンバーワンだ。小説では古湯を含めた旧富士町が主な舞台の一つとなっている。古湯の温泉街には森の別荘があり小説内にたびたび登場する。現在は広い駐車場になっているが跡地であることを示す看板が立っている。嘉瀬川を船で上り、古湯から北山方面へ至るシーンが何度も描かれており、自動車がなかった当時、古湯が交通の要衝として重要な場所であったことを伺わせる。人が行き交うことで物語が生まれる。文学が生まれる大事な要素の一つだ。

夭折の天才歌人・原初枝

図書館を出て少し歩くと小学校がある。雪で覆われた校庭を抜けて階段を上り校舎前の中庭に出る。雪がさらに深くなる。足首まで埋まりながら体育館らしき建物へ向かうと、綿帽子のような白い雪を頂いた歌碑があった。おにぎり型のほっこりした自然石には

雪降り炬燵に入りて今いちとおとぎ話をのう母上よ

という歌が刻まれている。明治期の夭折の天才

雪の古湯
文学散歩

歌人・原初枝の歌碑だ。

原初枝は明治27（1894）年、生まれ。女学校時代から雑誌「少女の友」に投稿、毎月誌面を飾り「天才少女歌人」として名をはせたという。しかし明治43（1910）年、女学校4年のときに病を得ると、翌年に母親を亡くす。病床からその哀しみを詠んだのがこの歌だった。その1年後には初枝も19歳の若さで息を引き取る。歌碑は1986年、この歌に感動した同町の山中潤氏が建設費を負担して設置したという。

後で分かったのだが同小学校は現在廃校となっており敷地内は自由に立ち入りできないという。瑞々しい感性を持った天才少女歌人・原初枝のことを後世に伝えるためにも、同校の素敵な活用策を考えてほしい。

推理小説の大家・笹沢左保

小学校わきを流れる川の岸を下り、運動場の外周に植えられた桜並木沿いを歩く。橋を渡り、神社の前を通り、しばらく上ると瀟洒な建物が見えてくる。推理小説の大家・笹沢左保が1988年から7年間に渡って暮らし作品を生み出した邸宅だ。その仕事場は笹沢左保記念館として公開されていて、昨年から定期開館がスタートした。母屋わきの石段をのぼり、敷地の一番上にある平屋建ての記念館へ行く。

佐賀讃歌
笹沢左保
平成七年四月

北と南に海ありて
世に稀なる県なりき
紺碧の空にガラスの透明感
澄んだ空気の清涼感
溪流の下る緑の山々に
霧か霞と雲の湧く

肥前ノ国の時代より
伊万里有田は窯の里
宿場街道城下町
いまだに残る余韻あり
ビルや車の数ならず
古き歴史と伝統と
人の情けに文化あり
やがて友なる人も増え
幼なじみの鼻たれ小僧
そんな昔を振り返り
心安らく時を得る

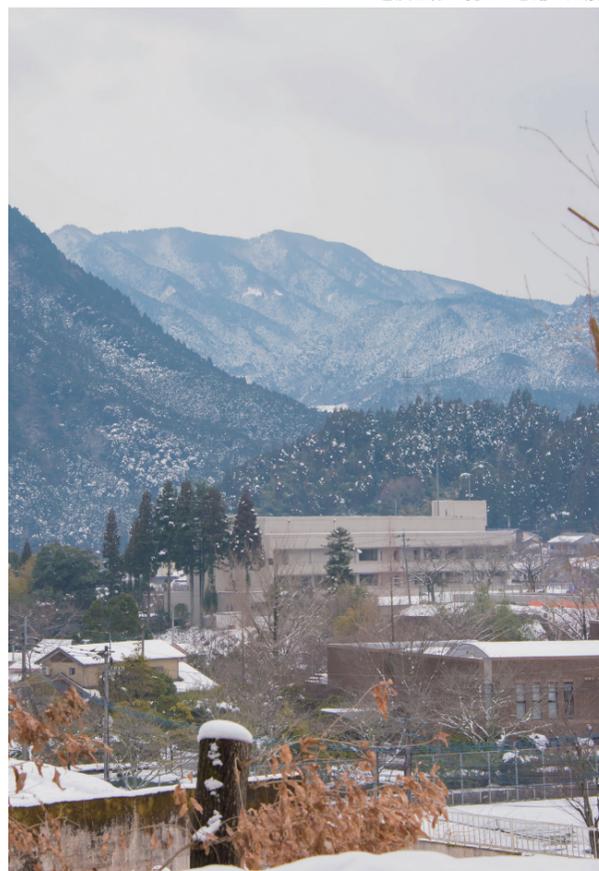
雪の古湯 文学散歩

笹沢左保は1930年、横浜生まれ。交通事故療養中に執筆した初長篇「招かれざる客」で1960年に本格的な小説家デビューを果たす。推理小説、サスペンス小説、時代小説など、約40年の作家生活で380冊もの著書を残した。代表作「木枯らし紋次郎」は1970年代に名匠・市川崑監督の手でTVドラマ化。アウトローなヒーロー像が社会現象となるとともに、上条恒彦が歌う主題歌「だれかが風の中で」も大ヒットした。

入院中に古湯映画祭へゲスト出演し「田舎暮らしの経験のない私が空想していた故郷の風景がここにある」とこの地に居を構えることを決断した。

「その風景について笹沢先生は「抜けるような青い空に非常に美しい雲が浮いている。そう高くない山が幾重かに重なり合って、稜線を描いている。その下が、小さな盆地になっていて、鄙びた温泉場が湯けむりを立てている。周りは全て緑で、人工的なものは一つも無い。その周囲には、田畑が広がっている。その小さな町には、人影もなく、一本の道を中年の女の人が、日傘をさして一人だけぽつんと歩いている」と講演で語っておられます」と教えてくれたのは同館館長の島

笹沢左保が愛した古湯の風景



直筆原稿と愛用の万年筆



執筆中の笹沢左保を撮影した写真



書棚には著作が置かれていて、自由に読んでもOK



▲坂を上ると「笹沢左保記念館」が見えてくる▼館内の床に残されたFAX引き込み線について教えてくれる島ノ江修治館長



▼住所 佐賀市富士町大字小割川25579 ▼入場料 大人3000円 小学生以下無料
▼休館日 水曜 ▼問い合わせ ミサワホーム佐賀内、電話 0952(23)7141。

雪の古湯 文学散歩

佐賀を愛した文豪の息遣いを感じる

ノ江修治さん。これだけの文言が暗記でスラスラ出てくることに素直に感心してしまう。

実は島ノ江さん、生前の笹沢左保とは面識がなかったという。友人と古湯に宿泊した際、たまたま訪れた同記念館で、笹沢左保と佐賀とのつながりに感銘を受け、この場所をさらに活用すべく、運営していたミサワホーム佐賀に協力を申し出たという。それまで同館は観覧希望があった場合などに不定期公開していたが、昨年からは島ノ江さんらボランティアスタッフの協力の元、定期開館をスタートした。お客の案内のほか、広い敷地の管理も担当している。この日も早朝から出勤し階段に残った雪を降ろしてしたというから頭が下がる。島ノ江さんは素晴らしい情熱で笹沢左保の業績を調べ上げ、ここを訪れる人たちに伝えている。その「名解説」も楽しみの一つだ。

展示の中心は大量の直筆原稿や著作本。「笹沢先生の原稿は全て直筆の手書きです。それを郵送ではなくFAXで送信していたので、ここに生原稿が残されました。当時、地方では大企業しか使えなかった光回線をこんな山の中まで引いていました」と語る島ノ江さん。男らしさ満載の作品群とは相反して、直筆原稿は端正な筆致で綴られている。島ノ江さんは「原稿には修正がほとんど見られません。繊細な仕事ぶりが伺えます。万年筆も高級品ではなく、一般的な女性用を

ずっと使っていました」と解説する。佐賀での生活で120作品を世に送り出したという。

さて笹沢左保というと「豪快伝説」。佐賀で親交があった人々からはその男っぷりを聞く機会が多い。「唐津湾でクルーザー貸切りの大パーティーを開いたり、徹夜で脱稿した後、時間関係なく友人を呼び出して、また徹夜で飲み明かしたり。そんな面白い話を聞いたことがあります」と島ノ江さん。いかりや長介主演でシリーズ化された佐賀県警を舞台とした作品「取調室」も、そんな佐賀の人たちとの交流から生まれた代表作だ。また笹沢左保の呼びかけで始まった「九州が大衆文学賞」は24回開催され、新人作家の登竜門としての役割を果たした。館内にはその歴史を振り返るパネルが展示されている。

笹沢左保の佐賀への愛が伝わってくる文章を島ノ江さんに教えてもらった。「佐賀讃歌」と題され1995年に作られたものだが、その中には佐賀の地勢や歴史、文化、そして人情への深い愛着が込められている。

笹沢左保や「望郷の道」の主人公・正太と瑠偉のような大人物は、最近では少なくなかった。かつて笹沢作品に魅了された人々だけでなく、若い人々にもカッコイイ大人の生き方について体感してほしい。雪を頂いた山並みとそれに抱かれた古湯の街。大きなガラス戸からは笹沢左

保の愛した古湯の風景が今も変わらず存在していた。

中国の大家作家・郭沫若

笹沢左保記念館から古湯中心部に戻る。同館で「富士町文学さんぽ」という地図をもらったので、それを参考に歩く。小学校の近くにある「東京屋」という旅館で「郭沫若が池で水浴びをしていた」と書いている。

郭沫若は1892年(明治25年)、中国生まれ。1914年に日本へ留学し九州帝国大学医学部を卒業。在学中に文学活動に励み、21年、日本で設立した中国現代文学団体「創造社」に参加する。福岡市に住んでいたが中国人への風当たりが強さに辟易し、24年、妻子5人を連れて、熊の川と古湯に約1カ月逗留する。その間、随筆「山茶花」や「ツバキ」「墓」読書、小説「白髮」「葉羅堤之墓」などを執筆したという。私小説的作品「行路難」の中に「夕日が川上川の川面に照っていた。澄んだ清々しい流れがきらきらと輝く白い石の間から歓呼の声をあげて、湧き立っていた。青翠の寒林、まっかなまんじゅしゃげ、黄金色の柿のある両岸の高い山も、一進一退して人に向かってうなずき微笑しているように思われるのだった」という一文がある。この周辺の風景が現代中国を代表する文化人の詩情を刺激したことを伺わせる。

同年末に中国へ帰国、政治活動に身を投じる。第二次世界大戦後は中華人民共和国の建国に参加。政務院副総理、中国科学院院長を経て、54年には全人代常務副委員長に就いた。その一方で中国の近代文学・歴史学の先駆者として活躍。42年、代表作である戯曲「屈原」を発表、大反響を得たほか、中国古代史学において甲骨研究に大きな業績を上げた。三国志関連では従来、悪役とされていた曹操を再評価している。

そんな中国の「知人の巨人」郭沫若が水浴びした池とは？東京屋で尋ねたところ、代表の原勘二さんが「昔、郭沫若さんがこの旅館に泊まった際に、敷地内の池で水浴びしたという話は聞いたことがあります。でも、もうその池は埋めてしまいました」と教えてくれた。せつかなので跡地を見学することに。道路に面した、現在、駐車場となっている場所に、その池はあったという。「昔は池が上下二段あって、鯉が泳いでいました」と話す原さん。郭沫若が



郭沫若が水浴びした池跡を示す原さん

この地に来たのは、おそらく10月中旬。山間の地はすでに秋だったはずだ。季節外れの暑い一日だったのか、はたまた執筆がうまく進んで嬉しかったのか。いずれにしろ、中国を代表する文化人のお茶目な雰囲気伝わってきた。

日本歌壇の重鎮・斎藤茂吉

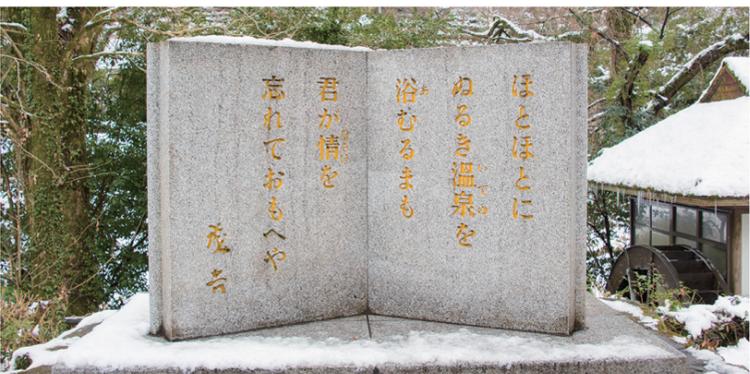
日本歌壇の重鎮・斎藤茂吉は長崎医学(現長崎大学医学部)の精神病学教授だった

授だった
1920
(大正9)
9月11
日から約
3週間、
古湯に滞在して
いる。スベ
イン風邪
が悪化し
たため、
唐津市を

経て、当地の「扇屋旅館」で静養した。今でも当時滞在した部屋が移築改装されて残っているというので扇屋旅館に足を運んだ。忙しくない時は部屋の内部見学可能とのことなので案内してもらおう。館内には佐賀北高書道部による茂吉の歌が飾ってある。通路をしばらく行き、外に出ると小さな離れが建っていた。これが茂吉が泊まった部屋なのか。中に入り



斎藤茂吉が宿泊した離れを移築した部屋



ぬる湯を詠った斎藤茂吉の歌碑



斎藤茂吉の古い歌碑



雪に残された鳥の足跡とそれを避ける靴跡

カーテンを空けると、嘉瀬川のせせらぎが飛び込んでくる。なるほど趣のある部屋だ。移築前の部屋も川沿いに立ち、當時もほぼ同じ風景が楽しめたようだ。室内の柱や欄間も当時のままだという。

茂吉の日記には「9月11日の朝、唐津を去り、1人になって、南山村古湯温泉にきた。ここへ来てから痰がだんだん減って、血の色がつかなくなった。2、3日してからはじめて「あらたま」の草稿の入っている風呂敷を広げて心しづかに少しづつ歌を整理して行った。9月30日には編輯を終えた。山中のこの浴場も僅かの間にひっそりとして行き、流れる如き月光が峽間を照らしたら、細く冷たい雨が終日降ったりした。むらがり立っていた曼珠沙華も凋んで、赭く金づいた栗が僕のいる部屋の前にも落ちたりした」と書いてある。古湯の独特の約38度の「ぬる湯」が茂吉の心身を癒やしたのか、この地で38首の歌を詠んだという。古湯には茂吉の歌碑が2つある。扇屋旅館から露地を歩き、嘉瀬川の河畔に足を伸ばす。赤い橋の手前には本の形をした石碑に

ほとほとにぬるき温泉(いでゆ)を浴(あ)むるまも君が情(なさけ)を忘れておもへや

という歌が刻まれている。先ほどの日記の続きには「山の祠の公孫樹の下には、いつしか黄色に熟した銀杏が落ちはじめ、毎朝それを拾うのを楽しみにしていると、ある朝『ギナンヒロフコトナラヌ持主稲口熊蔵』という木の札が公孫樹にぶらさがっていたりした。10月3日に、すべてに感謝した心持ちで古湯を立った」と記されている。このユーモアあふれるエピソードが生まれたのが、この付近。痾瀨持ちとして知られる茂吉が非常にリラックスしていた様子が伝わってくる。川沿いを歩きしばらく行くと、もう一つの歌碑がある。河原から1段上がった人目につきにくい場所だ。

うつせみの病やしなふ寂しさは川上川のみなもどころ

と記された石碑の前の広場に積もった新雪の上には鳥の足跡が残っていた。文学者が愛した街・古湯では鳥までも歌碑を愛めるのか。などとぼんやり想っていたら、足跡を消さないように遠回りして歩いた人の靴跡に気づく。なにげない日常の細部に流れる詩情。そういう人々がいるからこそ文化人が安らげるのだ。

古くからの交通の要衝だからその物語と、郷愁を誘う山河、心身を解きほぐす「ぬる湯」と、歌心を秘めた街の人々。文学者を刺激し癒やすものが、ここ古湯にはある。